

本科 1 期 7 月度

解答

乙会東大進学教室

# 東大国語



## 【添削課題】

出典：村上陽一郎『生と死への眼差し』／東京大学 02年

## 文章略解

人間は他者との関係性の中で生き、自己認識も周囲の存在との関わりの中で形成される。したがって生にある間の個我の孤絶性に対する認識は表層的・抽象的たらざるを得ない。これら周囲との関係性から完全に隔絶される自己の死への対峙こそ、人間が極限の孤絶性を知る唯一の契機なのかも知れない。

## 解答

- (一) いずれ訪れる自己の死は、生きている間は決して体験できず、他者の死を介しても理解不可能なものであるということ。
- (二) 他者の死は、自己の死を考える際に何らの参考にもならず、自己にとっては単なる消滅以上の意味をもたないから。
- (三) 一切の人間の関係性を失う死との対峙への恐怖が、かえって他者との関係性を前提にした人間存在のありようを示すということ。
- (四) 知性による表層的な孤絶性の認識に反して、個は自己と未分化な周囲の存在や状況との関わりの中で形成されるということ。
- (五) 人間は常に他者との関係性の中に生き、周囲の存在との関わりの中で自己を形成するが、自己の死と対峙するときだけは、第三者的な他者の死も、孤絶性についての知性による表層的な認識もまったく意味を失い、すべての関係性と完全に隔絶されるから。〔115字〕

(六)

a || 空疎

b || 錯覺

c || 模倣 (摸倣)

d || 抱擁

出典：中村雄二郎『感性の覚醒』／オリジナル問題

文章略解

不確かで曖昧なもののみなされる感情にも、まとまりや秩序がある。表層的で移ろいやすい情動が持続することで情念となり、個人の中で統御され、意識して持続される感情が生まれる。集団にも持続する感情としての集団感情が存在し、それは分節化し体系化されることで固有の文化を作る。個人の感情も集団感情の共同性と持続性によって方向付けられており、その共同性は共通の言語を持つ社会としての国家と表裏をなす。

解答

- (一) 感情にはまとまりや持続性を持つという側面も存在するから。
- (二) 情念はある一つの思いに支配されそれが全てとなっている段階だが、感情はその思いが制御され正当に位置づけられた段階である。
- (三) まとまりを持った共同感情は、共通の言語に多くを負いながら、分節化され体系化された様々な固有の文化を形成することを通して一つの集団を形作るということ。
- (四) 分節化され体系化された共同感情は固有の文化を持つ集団を形成するが、それは同じ言語を持った国家や社会と表裏をなすものだから。

(一) 理由説明問題。文章の論理構造が見抜けていれば容易に解ける設問。ここは、第一段落・第二段落で「感情」についての一般論を述べた上で、「たしかに一面において、感情には」。しかし、果たして感情は単にそのようなものだろうか」と譲歩構文を用いて、筆者自身の論へと展開していく部分になっている。それゆえ、傍線部の後続部分に、解答の根拠が存在することになる。

そこで述べられているのは、「おのずとあるまとまりがあり秩序があることがわかる」ということである。筆者が相手取っている一般論では、「感情は不確かで曖昧なもの、とりとめのないもの」「そのときどきで移ろいやすく、またしばしば矛盾を含んでいるように見える」と考えられていたのであった。それゆえ、答案ではこれとは反対の性質、すなわち一定の秩序があり持続性がある、という点を前面に出してまとめることになる。なお、傍線部が「必ずしもくはない」という部分否定の形になっているので、一般論を全否定してしまわないように言葉遣いに注意しておこう。

(二) 相違説明問題。相違説明の答案作成上の注意点は、各々の語句の説明に終始してしまわないようにすることである。たとえ個々の説明が正しくても、両者の違いが鮮明になっていなければ高得点は望めない。(対比) 関係に注意して両者の相違点を明確に把握するのが、相違説明問題の鉄則である。

ここは第三段落での文章の展開(譲歩構文)を受けて、感情の持つ様々な側面を概念規定している部分。本文では「情動」「情念」「感情」という三つの言葉で取り押さえられているので、まずはこれら三者の関係を的確に理解するところから始めよう。「怒り」の例も参考にとすると、

情動⇨移ろいやすく、一時的なもの。すぐに消え去るもの。

情念⇨ある部分的なまとまりや持続性を持つが、制御されておらずそれによって逆に支配されているようなもの。

感情⇨まとまりをもったもの。制御され秩序づけられたもの。

と整理されるだろう。その上で、「情念」と「感情」の相違に着目すると、それは怒りなら怒りというその思いが、制御され意識化されているか否かという点がポイントということになる。つまり、「情念」の段階では、人は怒りに我を忘れており、そのことのみ支配されているのに対し、「感情」の段階では、人は落ち着きを取り戻し、怒りを自分自身の中で正当に位置づけ統御しているのである。

この点を読み取ったなら、あとは「Aは〜だが、Bは〜である」という相違説明答案の型に当てはめていくだけ。

(三) 内容説明問題だが、ここでは「まとまりを持った感情」がどのようにして「そのような集団」＝「共同性の強い集団」を構成するのか、の説明が求められていることに気がつきたい。筆者が自身の論理を展開した後のまともに相当するような箇所では、しばしばスタートとゴールだけを示したような「AはBである」という文が述べられることがある。そういう箇所に傍線が付された場合は、理由説明であれ内容説明であれ、この場合のようにAとBの間、すなわち両者を結び付ける中間項を指摘するというのが基本的な作業課題となる。

もともと傍線部の場合は、「個人」について「このまとまりが、通常その人の人格や性格といわれているものを形づくるのである」(第三段落)と述べられていることの「集団」版なので、具体的な中間項は、「集団」について述べている後続の第八段落以降から探していくことになる。特に注目したいのが第九段落。ここでは、「緊密なまとまりを持った」「集団の共同感情」は、「内部的に分節化され、体系化され」て「固有の文化を形づく」り、そしてそれらが組み合わされて「一つの地方、社会、時代、国などに固有の文化を形づくるのである」と述べられている。また、続けて「共同感情はその多くをくラング(国語、言語体系)に負っている」とも書かれており、第十段落では「共同感情は共通の言語に多くを負い、分節化され、体系化されており、このようなものとして、同じ言語を持った共同社会、とくに国家と表裏をなしている」とまとめられている。ここに述べられている「共同感情」が傍線部の「まとまりを持った感情」に、また「一つの地方、社会、時代、国」や「共同社会」が同じく傍線部の「そのような集団」に対応していることは明らかだから、分節化・体系化されて固有の文化を作る、共通の言語に多くを負っている、といった要素がここで指摘すべき中間項ということになる。

(四) 理由説明問題。本文全体の論旨にかかわる設問だが、傍線部を含んだ一文が「したがって」で始まっていることに注意しよう。言うまでもなく「したがって」は因果関係を示す接続語。よって、この前の部分が答案の骨子ということになる。このような論旨にかかわる設問では、つい大局的な事柄に目が奪われてしまい、こういう基本的なところを見落としてしまいがち。十分に注意しよう。

さて、その前の部分だが、「集団」について述べた第八段落以降の内容を再び確認しておく、第八段落では「感情は個人的であ

るよりもむしろ集团的なものなのである」ということが、また第九段落では(三)で考えたように「まとまりを持った感情がそのような集団を形づくるのである」ということが述べられていた。つまり、集団によって条件付けられていると同時に、また集団を形づくることにもなる、という感情の持つ双方向的な性格が、ここでは述べられていたのである。そして、その二つの事柄が第十段落で「二つのこと」として確認され、「したがって」によって傍線部へと展開される、という論理展開なのである。ただし、この「二つのこと」がともに答案のポイントになるわけではない。図示すれば、

・感情は個人的であるよりもむしろ集团的なものなのである。↓共同感情を問題とする上でもっとも基本的な集団は共同社会(国家)である。

・まとまりを持った感情がそのような集団を形づくるのである。↓国家⇨社会を考える上で、感情の共同性は重要なものである。  
という対応になるから、傍線部の理由としては二つ目のポイントが中心ということになる。つまり、共同感情は地方や国など様々な集団に固有の文化を形成するが、それが多くを言語に負っているために、その集団は同じ言語を持った共同社会(国家)と表裏の関係をなしやすい、ということである。

## 【問題】(演習)

出典：宇野邦一『反歴史論』／東京大学 08年

## 文章略解

歴史とは、膨大な前歴史的領域から、特定の世界観に基づいて事象を取捨選択して構成されたもので、それが共同体や個人のアイデンティティの基盤となり、ひいては個人の生そのものをも決定づける。しかし同時に偶然の出来事や個人の自由な選択の総和として形成されてゆくものでもある。人は自己がそのような歴史の結果としての存在であり、同時に自ら歴史を形成する存在でもあるという自覚を持つ必要がある。

## 解答

- (一) 叙述によって歴史を画定しようとする歴史学自体が、画定不能な前歴史的領域を前提として成り立つものだという事。
- (二) 共同体の成員の自己意識の基盤となる歴史認識は、そこで支配的な価値観によって過去の事象を取捨して構成されたものだという事。
- (三) 記憶は地球上の物質や生命すべての履歴を含むのに対し、人間の歴史はそれらを特定の基準で選別して記述されるものだから。
- (四) 歴史が過去の人間の集団的営為の集積である以上、先験的に個人の生を条件づけ、意志や選択をも規定するものとなるということ。



(五) 歴史は社会の共有認識に基づいて構成され、個人の生を規定するものだが、同時に個人の自由な選択や偶然によって形成されてゆくものでもある。したがって人間は、所与の条件の中で主体的に歴史に参加する困難と責任を担わなければならないということ。

[116字]

(六) a 散逸(散佚)      b 超越      c 機会      d 信仰      e 矛盾

文章略解

写真は主体の思想や意識の表象という定式を越えて、世界のありさまを無媒介に呈示する。そこに示されるのは表現主体の思想や意図、人間的解釈を受け付けない不気味な側面をも含んだ世界の姿である。写真という媒体によって、人間は世界に対する一種の無力感と同時に、超人間的な構造としての世界のありさまを見る。

解答

- (一) 表現芸術の、世界に対する無力感と、世界の意味を呈示する可能性についての認識という、二つの反応が同時に生ずること。
- (二) 写真は、表現主体の意図に従って現実を写したものであり、その思想の表象であると考えられていること。
- (三) 人間の思想や感情移入による解釈を拒絶する現実の世界の姿が、二枚の不連続な写真によって無媒介に呈示されているということ。
- (四) 写真が表現するのは人間の思想や意図を越えた世界の意味であり、主体の意識的な思想表現を試みても失敗に終わるということ。

解説

個々の設問を考える前に、本文全体の大まかな展開をおさえておく。

- ① 「かりに『写真になが可能か』という問いを……(1行目)」「……表現芸術のすべてについていいうることなのである(7行目)」

写真と世界とのかかわりを問うと、「何もできない」という「無力感」と、写真によって世界のさまざまな意味を捕捉し得るといふ、「可能ななにかがある」という認識との二つの思いが生ずる。

② 「たとえば、今日、われわれの……（8行目）」～「……どのような透徹した精神のリアリズムもありえない（14～15行目）」  
前記①の「無力感」と、それによって到達できる「自己認識」について。

③ 「だが写真がわれわれに衝撃を与える機会は……（16行目）」～「……人間の歴史の膨大な地質を構成しているようにみえる（31～32行目）」

前記①の、写真によって捕捉し得た「世界のさまざまな意味」と、写真の世界に対する関与のあり方。

④ 「そう考えれば、改めて……（33行目）」～「……構成するプロフェッショナルなのか（34行目）」

前記②③をふまえた上での問題提起。

⑤ 「主体の意識を考えた時、……（35行目）」～「……人間という生まの具体性とが織りあげる全体化のなかにある（46～47行目）」  
前記④の問題提起に対する、「写真」「写真家」と、写真という営為を通して捉えられる「超人間な」世界のありようについて。

本文が以上の展開であることを前提に、個々の設問について考えてゆく。

(一) 設問要求が傍線部の内容説明であり、傍線部にある「この」の指示対象を考えれば答案の内容的部分については比較的簡単である。指示語の指示対象は直前の一文の「こうした問いと二様の答えのくり返し」であり、「こうした問い」および「二様の答え」はそれぞれ、「写真になにが可能か」という問い、「写真には何もできない」という一種の無力感、「写真に可能ななにかがある」という認識である。したがって、「写真に何が可能かという問いに対して、世界に対して何もできないという無力感と、世界の意味を捕捉できる可能性の認識という二通りの反応が生じる事態が繰り返されるといふこと」などとなるが、これでは解答欄の大きさからいってあまりに長すぎる。ここでまとめた三つのポイント「写真になにが可能かという問い」「無力感」「可能ななにかがある」をすべて答案に明記するのは事実上不可能であると判断する必要がある。傍線部「この」の指示対象である「こうした問いと二様の答えのくり返し」の部分は、直後に「どちらか一方だけではありえない」と続くので、ここでの重点は「問い」よりも「二様の答え」である。また「二様の答え」の内容である「無力感」「世界の意味を捕捉できる可能性の認識」双方とも、内容的に「問い」の「世

界に対する関与」を含む。以上の点から、「世界に対して無力」という感情と、「世界の意味を捕捉しうる可能性についての認識」が並存する、という形でまとめるとよい。なお、傍線部は直後に「……はなにも写真に限ったことではない。表現芸術のすべてについていいうることなのである」と続くので、答案も「写真」に限定せず、「表現芸術」一般についてのものとし、また、「この」の指示内容にある「くり返し」については、以上のように「二様の答え」を中心にまとめるといふ観点（本文にも「その無力感の下からたちまち意識に上ってくるのは」云々とある）から、答案には明記しない。

(二) 傍線部の直前に「いわば」という語があり、それによって傍線部「写真にかぶせられた擬制」が、直前の一文の「写真にまつわるさまざまな既成の価値」と対応することがわかる。この部分はこの解説冒頭で見た全体の展開の②「無力感」の説明部分であり、「既成の価値を破砕」して「自分を位置づける」うえでその「無力感」が「有効」とされている点から、ここでいう「既成の価値」とは、「写真が世界に対して何かをなし得る」という考えを支える価値的思考であると判断できる。この直後（本文の展開の③）以後、「写真」が示す「世界の意味」について、「言葉でも意識でも捉えられないわれわれの存在の深いところに衝撃を与える」「もはや彼の思想とか意識とかいわゆる主体を越えてしまつて」とあり、これらの記述が傍線部の直後の「虚構をひとつひとつはがしておのれの意識と肉体が露出するところまで下降する」云々と呼応していること、「しかもこの写真家は戦争を告発する意図によって撮つていたのではない」「別の目的でとつた写真の場合も少なくない」「このような無数の人々の無数の偶然によって」などであること、さらに展開⑤の部分の冒頭付近に「自分の内部に思想があつてそれを写真に表現するという俗流の考え方」云々（傍線部工）とあることから、「既成の価値」＝「写真にかぶせられた擬制」とは、「写真は撮つた人間の思想の表現である」「主体の意図に従つて現実を写す」などの（俗流の）考えであるということになる。

(三) 傍線部に含まれる指示語「そこ」の指示対象が直前の一文の「二つのショットの不連続のあいだ」であることは簡単にわかる。そこに「現れている」とされる「ゼロの世界」という比喩表現の内容が最大のポイント。本文の全体的展開から、この部分は、「写真によって捕捉しえた世界のさまざまな意味」の説明部分にあり、傍線部分を含む段落はその例示である。したがつてこの部分の内容に直結する記述は、つづく「この醜悪さが」以下の部分にあると判断できる。すると「もはや言葉でも意識でも捉えられないわれわれの存在の深いところに衝撃を与える」「写真が継起するあいだに消失した世界は、もはや彼の思想とか意識とかいわゆる主体を越

えてしまつて、何ものかになつてしまつている」「われわれは死に立ち会つたというより、死のゼロ化に立ち会つたのである」など  
とつづく記述が、「ゼロの世界」の説明になつてゐることになる。傍線部の「ゼロの世界」には、「美しさも悲しみもない」という  
修飾語句が付され、これが「言葉でも意識でも捉えられない」と対応する点から、「ゼロの世界」は「人間の解釈を受け付けない」  
ものであることがわかる。さらに、これら「ゼロの世界」の説明にあたる記述を介して、つづく段落に「この問題をもう少し広げて  
みると、写真には、こうした世界の不気味さをとりだす能力がある」とあり、これが前記展開⑤の部分の「写真は無媒介に世界を目  
の前に現わす」や「写真家は、世界が自己をこえていること……人間の意識によつて構成されるものでもない」に直結しているとい  
う構造である。以上をまとめて答案とする。なお、傍線部のあたりで直接的に話題になつてゐるのは「死」であるが、これは全体の  
展開上「例示」であり、したがつて答案を「死」に限定した内容にする必要はないと判断する。

(四) すでに(二)の解説でわかるように、傍線部の前半「自分の内部に思想があつてそれを写真に表現するという俗流の考え方」は、写  
真にまとわりつく「既成の価値」的思考であり、つまり「写真は主体の思想の表明である」という考え方である。また(三)の解説で見  
たように、「写真によつて捕捉しえた世界のさまざまの意味」つまり「写真」が表現するのは「思想とか意識とかいわゆる主体を越え」  
た、「不気味さ」||「自己を越え」た「反人間的な、あるいは超人間的な構造」である。したがつて傍線部の「裏切られる」とは、「写  
真で思想の表明を目指しても、写真はその思想を越えた世界を写しだしてしまう」という意味と捉えられる。以上を整理してまとめ  
ればよい。

## 【問題】(演習)

出典：篠原資明『言の葉の交通論』／東京大学 03年

## 文章略解

詩中への他詩の引用は、過去の詩の別様でもありえた可能性を自作の中で実際に別様に展開する作業である。引用作業の中には、現在から過去へ、過去から現在へ、という双方向の交通があるが、自作の独自性が低ければ、過去への交通のみが強くなる危険性が高くなる。その危険を避けるために、藤原定家は引用語数や本歌との時代の隔たりに基準を設けた。近代以降でも、草野心平や南川周三は独自の工夫によって双交通を実現している。

## 解答

- (一) 過去の詩句を引用した作品世界が、引用元の詩やその前提となる作品群の多様な可能性の中に埋没して、独自性を失うこと。
- (二) 読者の意識を引用した作品に向ける力と同等の、読者を自作の表現に引き戻す力を詩に持たせ、独自の作品世界を確立したということ。
- (三) 作者が現在の自分を幻想の過去に置く作品世界の中で、多重化した過去志向性が同時に現在志向性としても働いているということ。
- (四) 時間の束縛から解放する形で作者が展開した蕪村の精神が、時代を越えて作者に継承されている、と読者は感じること。

## 文章略解

私はここ十年ほど、右腕が痛くてピアノが叩けないことがある。そうした時に、ただ鍵盤の上に指を置くだけで、その骨を通じて音が聴こえてくるような感覚にとらわれる。まるで条件反射のように、肉体のイメージが自律的に作用するのである。私の自己認識というものは、基本的には他者を媒介とした言葉によるものだが、指に宿るこうした感覚は、他者と自分という区分を超えた普遍的な人間の感覚のあり方を示唆しているように思われる。

## 解答

- (一) 日常の意識や意志のあり方からは独立して、肉体それ自体の経験の蓄積による感覚が内面の生理に直接に響くこと。
- (二) 身体的に自分を知ろうという試みは、媒介としての他者に言語を用いて自分を投影させる作用を伴うから。
- (三) 他者と区別された個々の意識のあり方の奥に共通して存在している、人間の内部の普遍的な感覚のこと。

## 解説

(一) まずは傍線部分の内容を前後と見比べて、説明のポイントをはっきりさせておく必要がある。傍線部分にかかっている主語は直前の「それは」＝「骨の記憶のようなもの」(11行目)であり、その「骨の記憶のようなもの」については前の二段落に説明がされている。要はピアノの鍵盤に指を置くだけで、その指先を通してピアノの音が「聴こえてくる」という経験を指しているわけだ。これと傍線部とを照らし合わせてみると、おおよそ以下の三点ぐらいが説明すべきことがらとして見えてくるだろう。

- ① 「私とはかわりなく」の「私」とはどういうものか
- ② 「自律的に作動する」とは何が、どう自律的なのか
- ③ 「イメージ」とはどのようなものか

①については、傍線部分直前に「日常の意識や欲求とは違って」とあり、また16行目でも「日常の時空を読み取る五感と意識の領域でなら」とされていることからわかるだろう。ここでの「私」とは「日常の意識」ということだ。

②については、先に押さえた「指先」＝肉体の作用が、①の「私」とは独立してそれ自体ではたらくことを押さえなければいだろう。これについては、傍線部分の直後に「子どものときから腕や指先に蓄積された運動イメージが、鍵盤の手触りに条件反射して聴覚イメージを喚起する」とあるあたりを踏まえてもいい。

これらを踏まえれば③の「イメージ」なる語の説明の方向性も見えてくるだろう。8～9行目に「私の百兆の細胞は……共振する」あたりから、自分の内面にダイレクトに影響する旨の指摘がほしい。13～14行目の「私の指の運動を超えている」という表現も同種のことを述べているが、イマイチ具体性に乏しい。

以上①～③の内容が含まれた解答なら基本的にOKだ。

- (二) 傍線部分の直前に「だから」という因果関係の接続詞が用いられていることに注目すれば、その前の内容をまとめて解答が導ける……というのがこうした理由説明問題を解く際の「正攻法」だが、この設問の場合には、いきなりそう考えていつてもどこをどうまとめればいいのかわからない。ここではまず傍線部分の「自分との出会い」「自分を見失う」という表現の意味をきちんと考えておくべきだろう。そうでないと、理由説明の「着地点」が判然とせず、説明がばやけてしまう危険性が大い。

「自分を見失う」ということの意味については、直後の一文の中で「他者を介在させることなく私を凝視める」とあるところを裏返せば推測ができよう。要するに「他者の存在を媒介とさせること」である。このことは、19～20行目の「私は、私が他者のなかに生き、私の言葉が他者のためにしかなく、私の仕草が他者にしか見えないことを『身分け』ている」という表現と照応している。要するに、言語という道具を用いて他者を媒介として考えていくことによって「自分を見失う」のだ。

こう考えてくればそれが「自分との出会い」とどう関係しているのかも見えてくるだろう。この「出会い」については、17～18行



目に筆者が丸山圭三郎を引いて述べている部分で「身分け」⇨「身体で理解する」こととされている。しかしながら、その「身分け」は他者を媒介とせざるを得ないのである。そのことは「蝙蝠が自ら発する音波の反響で自分の位置を知るように、私は自分では決してなることのできない他者の鏡を借りて、絶えず自分を見続けている」（20～21行目）の記述でもわかるだろう。

したがって解答としては「自分との出会い」⇨身体的なもの⇨媒介としての他者が必要⇨「自分を見失う」という筋ができていけばいいだろうと思われる。なお「身分け」「言分け」という語は、このままでは使わない方がいい。

(三) ここでのポイントは、〈人間の記憶〉というヤマカッコつきの語の意味を一般的な表現に置き換えることにある。当然のことながら、手がかりは傍線部分の前後と傍線部分それ自体にある。

傍線部分の前で「『分け』ようとすると私と絶縁した私」と筆者は述べている。この「分け」ることは、その前の段落で述べられた「身分け」「言分け」双方を意味している。前問で検討したとおり、この「分け」ることは、必然的に他者の存在を媒介とする。そこで意識されるのは「他者と区別された私」ということではない。そうした区別のあり方から離れたらという筆者のモチーフがこの一連の表現から読み取れる。

その上で、傍線部分の「私の指の骨にも宿っている〈人間の記憶〉」という表現を見ていくと、そうした「区別」を超えた普遍的なるものへの筆者の指向が理解できよう。これは10行目の「大気がずっと歌い続けてきている韻律のように」という表現ともつながる。要するに時空を超えた普遍的なもの、ということだ。

この点の指摘が解答の軸になっていけば基本的にOKだ。







会員番号	
------	--

氏名	
----	--